

# 平安京右京四条四坊十五・十六町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京右京四條四坊十五・十六町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。平成14年度の第4冊目として、このたび葛野大路道路改築事業に伴います平安京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

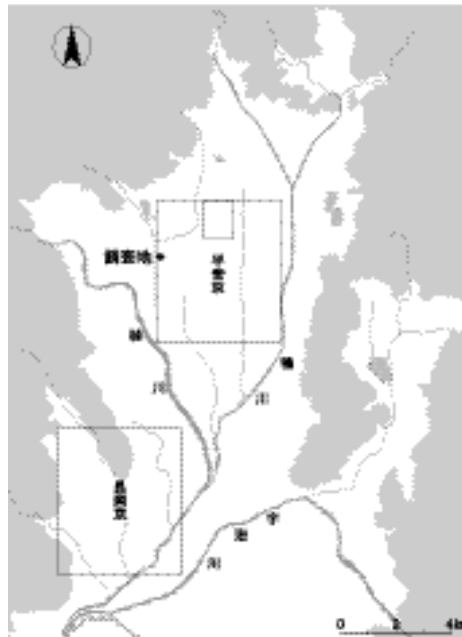
平成15年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京四条四坊十五・十六町跡
- 2 調査地点所在地 京都市右京区山ノ内苗町地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本龍雄
- 4 調査期間 2003年1月7日～2003年3月6日
- 5 調査面積 9区：25m<sup>2</sup> 10区：135m<sup>2</sup> 11区：15m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 伊藤 潔・近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 挿図の遺物の順に通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・担当調査員
- 13 作成担当職員 伊藤 潔・近藤章子

（調査地点図）



# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 周辺の調査	1
3 . 遺 構	5
( 1 ) 9 区	5
( 2 ) 10区	5
( 3 ) 11区	7
4 . 遺 物	7
( 1 ) SX33	8
( 2 ) SH54	9
( 3 ) 弥生土器	9
5 . ま と め	10

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	9・11区遺構平面図(1:100)
図版 2	遺構	10区遺構平面図(1:200)
図版 3	遺構	1 9区調査前全景(南から) 2 9区調査風景(南から)
図版 4	遺構	1 10区調査前全景(北から) 2 11区調査前全景(南から)
図版 5	遺構	1 9区全景(南から) 2 11区第1面全景(南から) 3 11区第2面全景(南から) 4 11区第3面全景(南から)
図版 6	遺構	1 10区第1面全景(北から) 2 10区第3面全景(北から)
図版 7	遺構	1 10区流路SX33東壁(西から) 2 10区竪穴住居SH54(北東から)

# 挿 図 目 次

図 1	調査位置図および周辺調査 ( 1 : 5,000 )	2
図 2	調査区基本層序 ( 1 : 40 )	5
図 3	SH54実測図 ( 1 : 40 )	5
図 4	SX33東壁断面図 ( 1 : 50 )	6
図 5	SX33・SH54出土土器実測図 ( 1 : 4 )	8
図 6	SX33出土土師器鍋	8
図 7	弥生土器実測図 ( 1 : 4 )	9

# 表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	3
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	9

# 平安京右京四条四坊十五・十六町跡

## 1．調査経過

葛野大路改築事業に伴い、10次調査となる発掘調査を実施した。調査地は葛野大路の西側で、三条通より南の右京区山ノ内苗町地内に所在し、調査区を3箇所設定した。7次・8次調査として、三条通以南の事業予定地東側部分で8箇所の調査を実施し、その継続として調査区に9・10・11区と付した。調査地は平安京右京四条四坊十五町（11区）十六町（9・10区）にあたる。調査区は7次調査で古墳時代の遺構や遺物包含層、平安時代前期の流路やその他多数の遺物を検出した地点の現道路を挟んだ西側にあたるため、関連する遺構・遺物の検出が期待された。

10区は旧建物の基礎および地下構造物によって1/3以上が攪乱を受け、上部の削平も著しかった。また調査区の中央部にあたる部分に、西側の工場から延びる東西方向の既存排水管があり、これを現状維持させるため、南北に二分した設定となった。

調査は1月7日から調査に伴う準備・付帯工事を開始し、3月3・4日に埋め戻し、3月6日に現場作業を終了した。

## 2．周辺の調査

当工事に伴う調査は、1988年の試掘調査から開始し、今回で10次調査となる。以下、回数ごとに主な成果を述べる。

1次調査 古墳時代の遺構は1・4～6区で検出した。北東から南西方向の自然流路を2条以上検出しており、土器の遺存状態が良好なことから、付近に集落の存在をうかがわせる。平安時代の遺構は4区で二条大路路面、2区で押小路両側溝を検出している。室町時代から江戸時代の遺構は、耕作に伴う小溝を各調査区で検出した<sup>1)</sup>。

2次調査 7区で古墳時代の土壌状遺構の一部分、3～5・7区で平安時代以前の動物の足跡と考えられる窪み群、6区で平安時代の冷泉小路北側溝およびそれに関連する東西方向の柱穴列を検出した。また、平安時代末期から鎌倉時代の東西溝を、平安時代の冷泉小路北側溝から南へ0.7mの位置で検出している。その溝に合流する南北溝も検出した。室町時代から江戸時代の東西・南北方向の素掘りの耕作溝は、重複した状態で多数検出され、各調査区で認められた<sup>2)</sup>。

3次調査 この調査は2次調査の調査区を拡げた状態で行われた。遺構に伴わないが、弥生時代から古墳時代の土器が微量ながら出土している。平安時代前期の遺構は、整地層と冷泉小路北側溝を検出し、平安時代後期の遺構は、東西方向の堀または柵になるとと思われる柱穴を5基、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代から江戸時代の遺構は、耕作溝が検出されている<sup>3)</sup>。

4次調査 室町時代後半の南北方向の壕と、それ以降の流路、江戸時代の耕作土層を検出した。

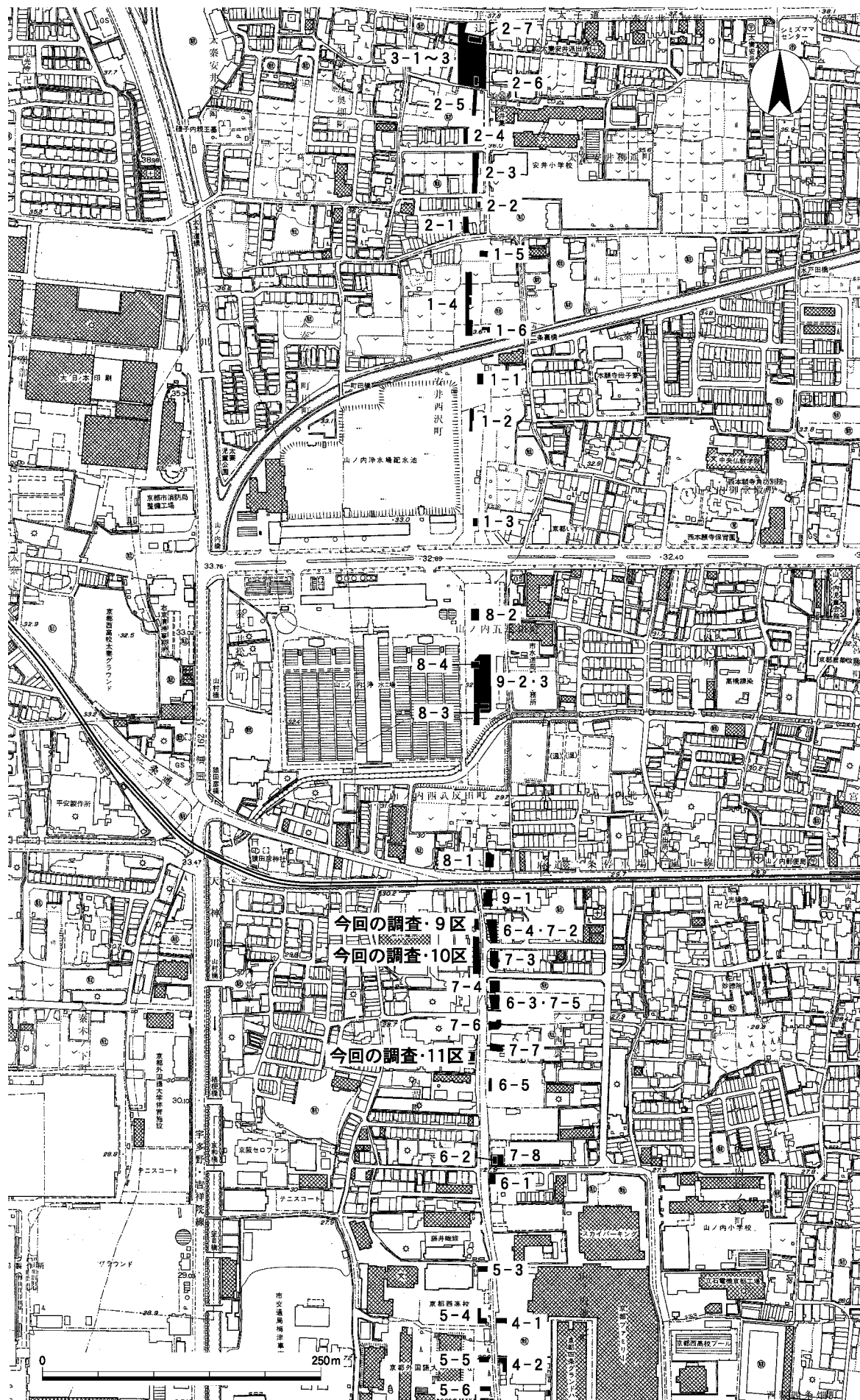


図1 調査位置図および周辺調査 (1 : 5,000)



表1 周辺の調査一覧表

調査区	年度	調査法	条坊	主な遺構	
1次	1-1	1988	試掘	右京三条四坊十六町	古墳の自然流路、室町～江戸の耕作溝
	1-2	1988	試掘	右京三条四坊十六町、押小路	平安の押小路東西両側溝、室町～江戸の耕作溝
	1-3	1988	試掘	右京三条四坊十五町	室町～江戸の耕作溝
	1-4	1988	試掘	右京三条四坊十六町、二条大路	古墳の自然流路、平安の二条大路路面、室町～江戸の耕作溝
	1-5	1988	試掘	二条大路	古墳の自然流路、室町～江戸の耕作溝
	1-6	1988	試掘	右京三条四坊十六町	古墳の自然流路、室町～江戸の耕作溝
2次	2-1	1989	発掘	右京二条四坊十三町、二条大路	室町～江戸の耕作溝
	2-2	1989	発掘	右京二条四坊十三町	室町～江戸の耕作溝
	2-3	1989	発掘	右京二条四坊十三町	平安以前の足跡状遺構、室町～江戸の耕作溝
	2-4	1989	発掘	右京二条四坊十三町	平安以前の足跡状遺構、室町～江戸の耕作溝
	2-5	1989	発掘	右京二条四坊十三町、冷泉小路	平安以前の足跡状遺構、鎌倉の冷泉小路北側溝、室町～江戸の耕作溝
	2-6	1989	発掘	右京二条四坊十四町、冷泉小路	平安前～中期の冷泉小路北側溝・柱穴列、平安末期～鎌倉の土壌状遺構、室町～江戸の耕作溝
	2-7	1989	発掘	右京二条四坊十四町	古墳の土壌状遺構、平安以前の足跡状遺構、室町～江戸の耕作溝
3次	3-1 ～3	1991	発掘	右京二条四坊十四町、冷泉小路	平安前期の冷泉小路北側溝、平安後期の柱穴群・土壌、室町の耕作溝、江戸以降の溝・井戸・土壌・柱穴
4次	4-1	1995	試掘	右京四坊四条十三町、錦小路・無差小路交差点内	室町後半の濠、室町以降の流路、江戸以降の耕作溝
	4-2	1995	試掘	右京四坊四条十三町、無差小路	4-1と同じ
5次	5-3	1996	試掘	右京四条四坊十四町	古墳～室町後半の流路、室町後半の水田、江戸以降の水田
	5-4	1996	試掘	右京四条四坊十三町・十四町、錦小路	古墳～室町後半の流路、江戸以降の水田
	5-5	1996	試掘	右京四条四坊十三町	室町後半の土壌、江戸以降の水田
	5-6	1996	試掘	右京四条四坊十三町	平安前期包含層、室町後半の土壌、江戸以降の土壌・水田
6次	6-1	2000	試掘	右京四条四坊十四町	時期不明の流路
	6-2	2000	試掘	右京四条四坊十五町、無差小路・四条坊門小路交差点内	古墳の流路、平安前期の包含層
	6-3	2000	試掘	右京四条四坊十六町、無差小路	平安前期の無差小路西側溝・土壌、室町～江戸の耕作溝
	6-4	2000	試掘	右京四条四坊十六町、無差小路	平安の土壌、江戸以降の耕作溝
	6-5	2000	試掘	右京四条四坊十五町	平安の土器を含む湿状堆積
7次	7-2	2001	発掘	右京四条四坊十六町、無差小路	古墳前期の包含層、平安前期の無差小路西側溝・建物跡2棟・土壌
	7-3	2001	発掘	右京四条四坊十六町、無差小路	古墳前期の包含層・水溜状遺構、平安前期の南北溝・流路状遺構、近世以降の耕作溝
	7-4	2001	発掘	右京四条四坊十六町、無差小路	平安前期の南北溝、近世以降の耕作溝・南北方向柵列
	7-5	2001	発掘	右京四条四坊十六町、無差小路	古墳前期の包含層、平安前期の南北溝・建物跡2棟・南北方向柵列、近世以降の杭列・耕作溝
	7-6	2001	発掘	六角小路・無差小路交差点内	近世～現代の溝・堀跡
	7-7	2001	発掘	右京四条四坊十五町、無差小路	平安前期の不明土壌、近世以降の耕作溝
	7-8	2001	発掘	右京四条四坊十五町、無差小路・四条坊門小路交差点内	古墳前期～中世以降の自然流路、平安前期の包含層
8次	8-1	2001	発掘	右京三条四坊十三町、三条大路	古墳前期の不明遺構、平安の三条大路北側溝・路面・建物跡1棟・不明遺構、室町の東西溝、近・現代のだるま竈
	8-2	2001	試掘	右京三条四坊十四町、姉小路	鎌倉～室町の耕作溝、室町の小穴
	8-3	2001	試掘	右京三条四坊十四町	平安の包含層、鎌倉～室町の耕作溝
	8-4	2001	試掘	右京三条四坊十四町	平安の溝・柱穴、鎌倉～室町の耕作溝
9次	9-1	2002	発掘	右京四条四坊十六町	平安の土壌・柱穴、近世以降の土取り穴
	9-2 .3	2002	発掘	右京三条四坊十四町	平安の柱穴、鎌倉～近世以降の耕作溝多数

この付近は室町時代の西院城跡に近接しているため、検出した濠が城に関係する可能性がある<sup>4)</sup>。

5次調査 3・4区で古墳時代から室町時代の流路、5区では室町時代後半の土壌を検出した。全調査区で室町時代後半から江戸時代以降の耕作土層を検出した。6区で平安時代前期後半の包含層を検出し、遺物がまとまった状態で出土している<sup>5)</sup>。

6次調査 2区で古墳時代の流路と平安時代前期の遺物包含層を検出した。流路内から出土した土器類は、磨滅しておらず保存状態が良い。3区で平安時代の無差小路西側溝や良好な遺物を含む土壌などを検出した。4区では平安時代の土壌、江戸時代以降の耕作溝を検出した。5区では上層に平安時代の土器を含む湿地堆積層を検出した<sup>6)</sup>。

7次調査 6次調査である試掘の成果により実施した。2区からは古墳時代前期の遺物包含層を検出した。また平安時代前期の建物跡2棟、土壌、無差小路西側溝を検出した。3区は古墳時代前期の遺物包含層、水溜状遺構を検出した。平安時代前期では南北溝と流路状遺構を検出し、良好な遺物が出土した。また江戸時代以降の耕作溝も検出した。4区では5区で検出した南北溝の延長と柵列を検出した。5区は古墳時代前期の遺物包含層を地山直上で検出した。4区の延長の平安時代前期の南北溝、南北方向の柵列、建物跡2棟を検出した。南北溝からは炭と共に平安時代前期の遺物が多量に出土した。7区は平安時代前期の遺物を多量に含む不明遺構、近世以降の耕作溝を検出した。8区は古墳時代前期から中世の遺物を含む自然流路を検出した。古墳時代の遺物は良好な状態で出土した。その他、平安時代前期の遺物包含層を検出した。

8次調査 1区は古墳時代前期の遺物を含む土壌状遺構の一部を検出した。また、平安時代前期の建物跡、平安時代の遺物を含む三条大路北側溝・路面を検出した。2～4区の試掘調査成果により今回の発掘調査が実施された。平安時代の遺物包含層、中世の溝を数条検出した。

9次調査 1区では平安時代の柱穴1基と土壌を検出した。その他江戸時代以降の土取り穴を9基検出した。全体に攪乱が著しい。2・3区では平安時代の柱穴を30基検出したが、建物としては並ばなかった。鎌倉時代から江戸時代以降の耕作溝を多数検出した。

註

- 1) 本 弥八郎「平安京右京三条四坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 2) 堀内明博「平安京右京二条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3) 山本雅和「平安京右京二条四坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4) 上村憲章「平安京右京四条四坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) 上村憲章「平安京右京四条四坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 伊藤 潔「平安京右京四条四坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年

### 3. 遺 構

#### (1) 9区

基本層序は表土下0.7～0.8mまで盛土・埋土、以下、椽瓦を多量に含む黒色・暗オリーブ色・暗褐色泥砂層、1.3m以下、明黄褐色粘土層の地山となる。調査区は旧建物の基礎および椽瓦の堆積層が大半を占め、遺構は近・現代の土取穴を確認したのみである。

#### (2) 10区

基本層序は地表下0.5～1.4mまで盛土および攪乱層、以下、調査区南半は盛土以下、平安時代以降の灰黄褐色砂泥層（第2面）、古墳時代以降の黒色泥土層（第3面）、以下、オリーブ褐色砂泥層の地山となる。北半は近世から現代層（第1面）、平安時代以降の

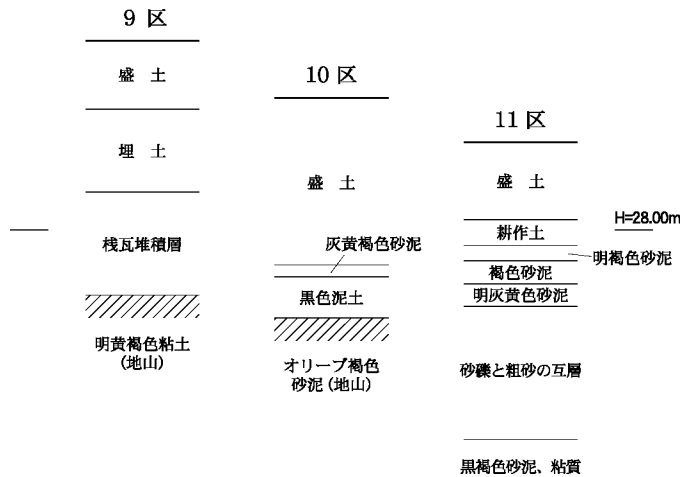
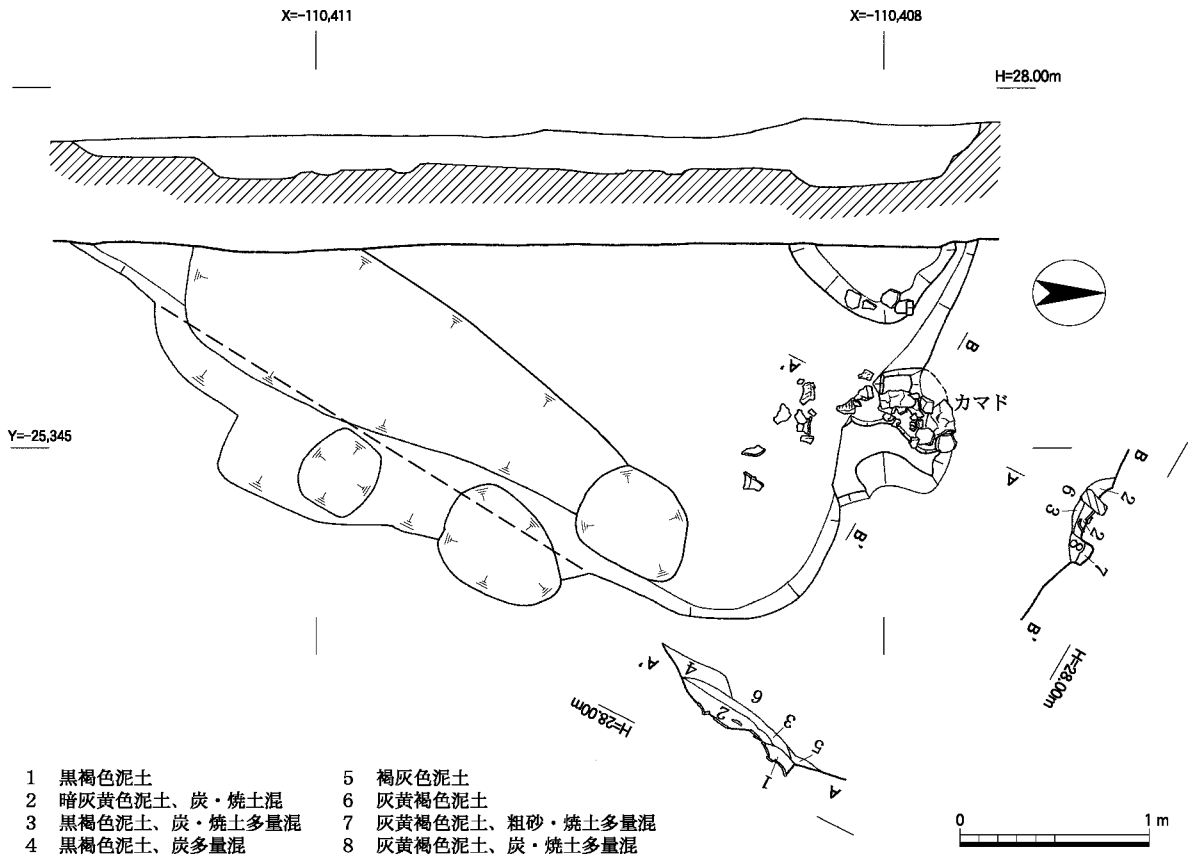


図2 調査区基本層序(1:40)



- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1 黒褐色泥土         | 5 褐灰色泥土           |
| 2 暗灰黄色泥土、炭・焼土混  | 6 灰黄褐色泥土          |
| 3 黒褐色泥土、炭・焼土多量混 | 7 灰黄褐色泥土、粗砂・焼土多量混 |
| 4 黒褐色泥土、炭多量混    | 8 灰黄褐色泥土、炭・焼土多量混  |

図3 SH54実測図(1:40)

黒褐色砂泥・黒色泥土層（第2面）、弥生時代以降の灰黄褐色泥土層（第3面）、以下、灰オリーブ色粘土層の地山となる。

主な遺構は、弥生時代の土壇・柱穴群、古墳時代前期の土壇、古墳時代中期の竪穴住居、平安時代の流路などがある。

調査区北半部の第3面で弥生時代から古墳時代の遺構を検出した。土壇SK46は、上部が削平されていたため、遺構の性格は把握できなかったが、その周辺に散乱した弥生時代中期の土器を含めると3個体以上が確認できる。柱穴Pit45・47・48・49・52の規模は径0.3m前後・深さ0.3m前後で、Pit45・48・49からは弥生時代の土器が出土した。SK50はわずかに一隅を確認しただけであるが、その形状から竪穴住居になる可能性がある。古墳時代前期（布留式併行期）の甕の小片が出土した。

調査区南半部の第3面で検出したSH54は、古墳時代中期の竪穴住居で、計測可能な南北の一辺が約4m、N-16°-Eの傾きをもち、形状は隅丸方形である。北壁の中心から東寄りの位置で据付カマドが検出されたが、カマドは破壊されており、焼土・炭・粗砂・粘土などで盛りあげられ、土師器鍋の破片が混入していた。カマドの西側で貯蔵穴とみられる土壇を検出した。東壁は平安時代以降の柱穴や攪乱などにより破壊されており、遺構の西半部は敷地外へと続くため、全体を把握することはできなかった。また壁溝・支柱穴なども確認できなかった。

平安時代の主な遺構は流路SX33がある。この流路は7次調査の3区で検出した流路に続くものである。北西から南東方向で、幅約3.6m、南北約8mにわたって検出した。流路は上部を削平されていたが、東西壁面の堆積状況からみて埋没の時期は大きく3段階に分けられるが、出土遺物が少量なため、時期の限定は困難であった。流路南肩付近の上層の微砂層より、鎌倉時代前期の土師器皿が5個体以上まとまった状態で出土した。もっとも古い時期の層は、平安時代前期の土器を包含する。

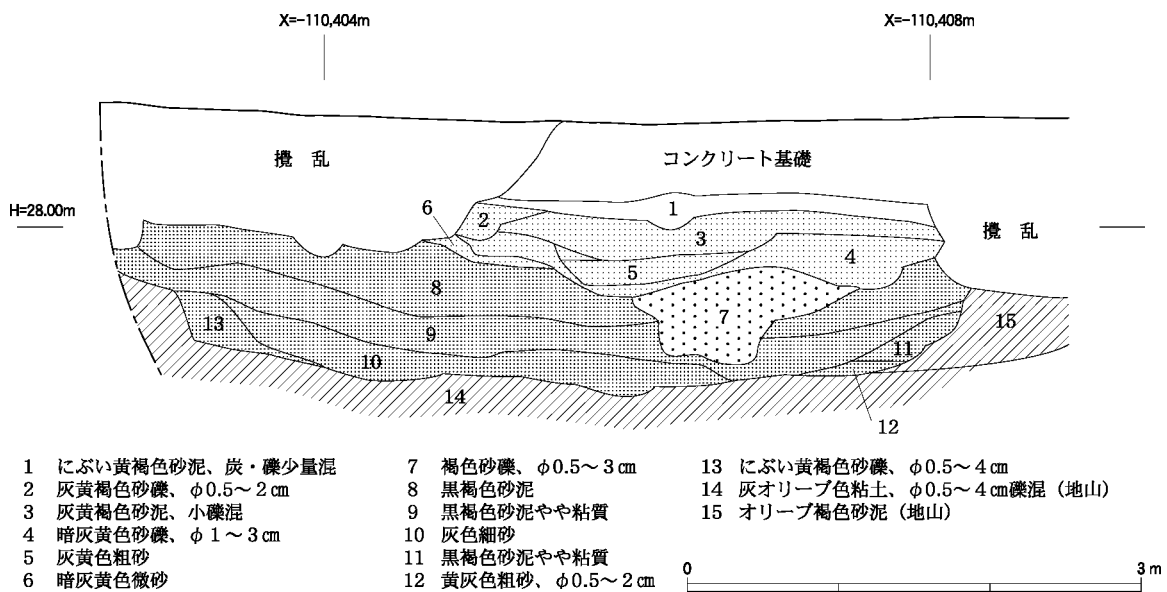


図4 SX33東壁断面図（1：50）

表2 遺構概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器	3箱	弥生土器4点	2箱	0箱
古墳時代	土師器、須恵器、製塩土器	2箱	土師器1点	1箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、平瓦、木簡、曲物	5箱	須恵器2点	5箱	0箱
中世	土師器、輸入陶磁器	2箱	土師器5点	2箱	0箱
近世以降	土師器、施釉陶器、染付磁器、棧瓦、トチン	10箱		1箱	9箱
計		22箱	12点(2箱)	11箱	9箱

調査区は攪乱を受けている範囲が広く、特に南半部では、平安時代以降の遺構や堆積層は削平されていると思われ、柱穴の残存部分を数基検出したが、詳細は不明である。

### (3) 11区

基本層序は、地表下0.4mまで盛土、以下、近世から現代の耕作土層となる。遺構面は3面確認したが、いずれも近世・近代の耕作に伴う小溝(SD1~7・9~15)が検出されたのみである。土壌SK18と落込みSX17は一部、断ち割りを行って堆積状況を確認した。その結果、砂礫と粗砂の堆積が0.8mほどあり、以下、黒褐色粘質土層となる。これらの堆積状況は6次調査の5区とほぼ同じで、個別の遺構として調査時に扱ったが、湿地状堆積であった。なお、黒褐色粘質土層上面の標高は26.9mで、これも6次調査の5区と同様である。

## 4. 遺物

遺物は整理箱に20箱出土した。

9区は、瓦堆積層から棧瓦やツヅミ型トチンなどの一部を採取した。

10区は弥生時代中期後半(畿内第 様式)の壺・甕・鉢類などが土壌、柱穴、包含層から出土した。土壌は上部が削平されていたが、攪乱層や周辺よりその土壌から出土した土器の同一個体が混入して出土した。弥生時代中期後半の土器は器面が磨滅することなく、良好な状態で出土したものが多し。

古墳時代前期の土器は、SK50から土師器甕、SK51から土師器高杯の裾部分が出土した。中期の土器はSH54のカマドから土師器鍋が出土した。SH54からはその他、土師器(甕・高杯)、製塩土器、須恵器杯身の小片が出土した。

平安時代の土器は、主にSX33から土師器(杯・甕・高杯)、須恵器(壺・瓶子)などが出土し

た。緑釉陶器皿小片、灰釉陶器椀底部などが出土した。

鎌倉時代前期の土師器皿が5個体以上まとまって、SX33の上層から出土した。1個体は、ほぼ完全な形で出土した。

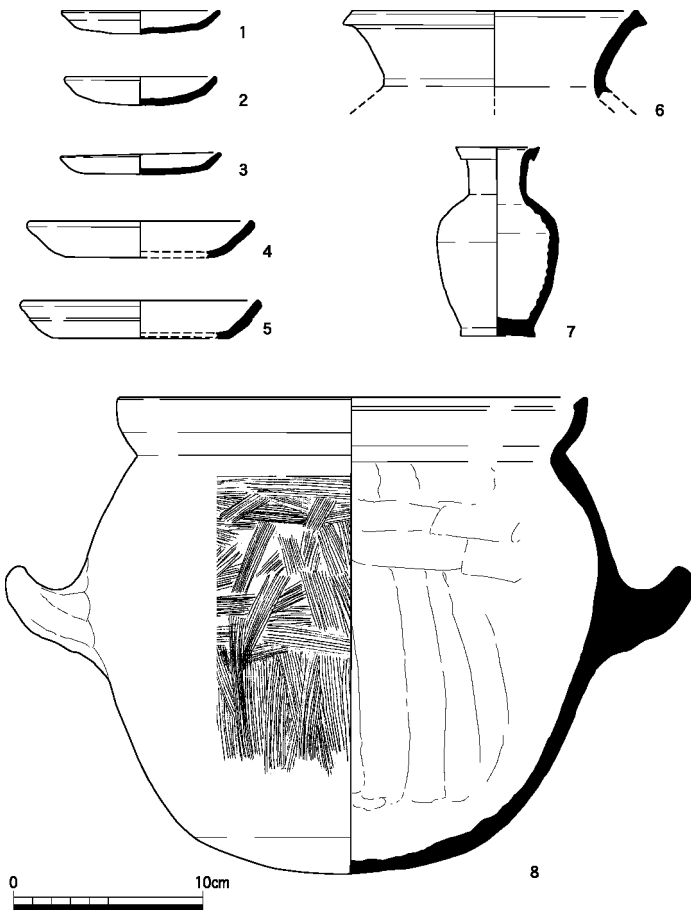


図5 SX33・SH54出土土器実測図(1:4)



図6 SH54出土土師器鍋

その他、SX33の砂礫層より曲物の一部と木簡が出土した。木簡は四文字あるのは確認できるが、状態が悪いため、判読できない。

11区は大半が近世の土師器、陶器がしめる。平安時代の土師器高杯、須恵器甕、平瓦、中世の土師器、輸入陶磁器などの小片が混在して出土した。また、湿地堆積層内の黄灰色砂礫層より磨滅した古墳時代前期の甕の小片が出土した。

以下に、図示した遺物について、記述する。

### (1) SX33

土師器皿(1~5) 1~3は口径8.4cm、7.8cm、8.4cmと小型で、口縁部はやや内弯し、端部は外上方へ開く。4・5は11.6cm、12.4cmとやや大型になる。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は外上方へ開く。口縁部内外面、横ナデ調整、外面指オサエによる。南肩付近より出土。時期は鎌倉時代前期である。

須恵器壺(6) 口径15.0cm、残存高4.6cmで、口縁から頸部のみ残存していた。口縁は外上方へ大きく開き、端部は面をもつ。内外面ともにナデ調整である。南肩の埋土より出土。平安時代と思われる。

須恵器瓶子(7) ほぼ完形であったが、頸部で破損していた。口径

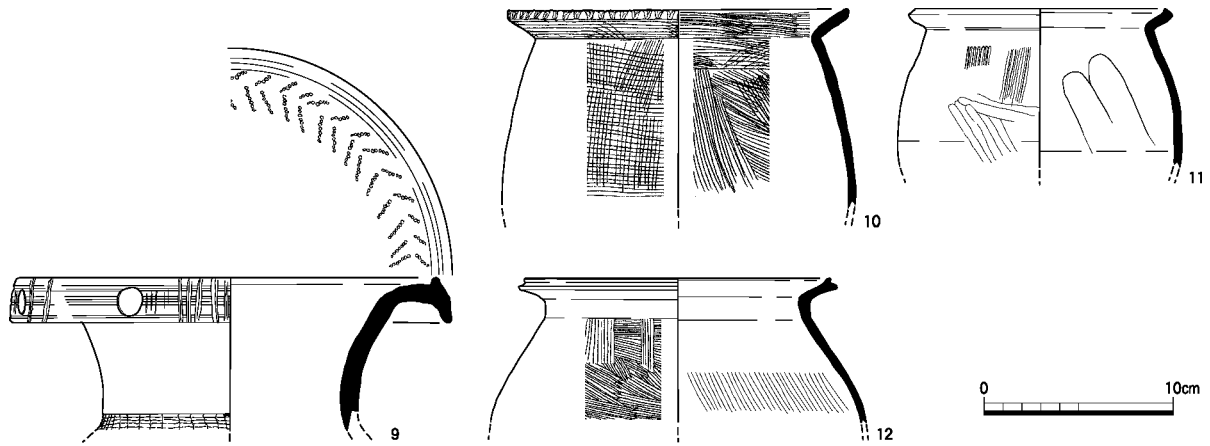


図7 弥生土器実測図(1:4)

4.4cm、高さ10.0cmである。口縁部は外反し、端部は面をなし、上端がわずかにつまみあげられる。平底で体部は卵型を呈する。内面にロク口目を残す。底部外面は回転系切りで未調整、外面は磨滅しているため、詳細は不明である。平安時代。

(2) SH54

土師器鍋(8) 口径24.6cm、高さ25.2cmで、いわゆる牛角状の面取りをした把手が付く。口縁は内弯しながら立ち上がり、端部はやや肥厚する。口縁部内外面、横ナデ、頸部内面は指オサエのちナデ、体部外面は横・縦・斜め方向のハケ目、内面は横・縦方向のヘラケズリ、底部内面は指オサエによりそれぞれ調整する。胎土は石英、長石粒を含む。古墳時代中期。

(3) 弥生土器

弥生土器壺(9) 口径22.0cm、残存高8.1cmである。口縁端部に4条の凹線文を巡らせ、3条1単位の縦方向の櫛描き文を施し、円形浮文を貼り付ける。内面は櫛描き羽状文を施す。頸部外

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器	3箱	弥生土器4点	2箱	0箱
古墳時代	土師器、須恵器、製塩土器	2箱	土師器1点	1箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、平瓦、木簡、曲物	5箱	須恵器2点	5箱	0箱
中世	土師器、輸入陶磁器	2箱	土師器5点	2箱	0箱
近世以降	土師器、施釉陶器、染付磁器、棧瓦、トチン	10箱		1箱	9箱
計		22箱	12点(2箱)	11箱	9箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

面には簾状文を施す。10区黒色泥土層出土。弥生時代中期後半（畿内第 様式）。

弥生土器甕（10・11） 10は口径17.8cm、残存高10.3cm、11は口径13.2cm、残存高8.3cmで、口縁部は外上方へ開き、体部は張りが少ない。口縁端部は面をもち、10は刻み目を施す。11は口縁部内外面ナデ調整、体部外面にススが付着する。10は口縁内外面は横方向のハケ目、体部外面は縦・横のハケ目、内面は縦・斜めのハケ目で、両面とも後にナデにより調整する。SK46出土。中期後半（畿内第 様式）。

弥生土器甕（12） 口径16.0cm、残存高7.6cmで、口縁部は外上方へ大きく開き、端部はナデ調整による凹線がめぐる。口縁部内外面はナデ、体部内外面はハケ目後、ナデ調整である。SK46出土。弥生時代中期後半（畿内第 様式）。

## 5 . ま と め

当該地は、平安京右京四条四坊十五・十六町に位置する。事業予定地の東側にあたる7次調査では弥生時代の遺物、古墳時代の遺構・遺物を確認している。その成果から周辺に弥生時代から古墳時代の集落跡などの存在が予想された。今回の調査で検出した弥生時代の遺構・遺物、古墳時代の竪穴住居はそれを裏付けるものであった。調査地の南東約200mの付近には、弥生時代から古墳時代の山ノ内遺跡があるが、これまで流路・溝などを検出したのみで住居跡は発見されていなかった。今回の調査地は山ノ内遺跡の範囲外にはなるが、この周辺で初めての住居跡を検出したことになる。調査区の東西幅が約5mと狭小なため、全容は明確にはできなかったが、住居跡ではカマド、貯蔵穴の存在は確認できた。出土遺物などから古墳時代中期（5世紀）以降と考えられる。さらに、今回出土した弥生時代中期の土器は、遺存状態が良好であった。このことから、弥生時代の集落の存在も期待していたが、調査区内の既存建物などによる破壊が著しく、明確な遺構の検出ができなかった。

しかし、10区の調査区で確認した弥生時代中期や古墳時代の包含層の広がりからみて、さらに西・北側へも集落が展開することが予測できる。



# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうきょうしじょうしぼうじゅうご・じゅうろくちょうあと							
書名	平安京右京四條四坊十五・十六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-4							
編集者名	伊藤 潔・近藤章子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうきょう 平安京右京 しじょうしぼうじゅうご・ 四條四坊十五・ じゅうろくちょうあと 十六町跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 やまのうちなえまち 山ノ内苗町	26100		35度 00分 16秒	135度 43分 20秒	2003年1月 7日～2003 年3月6日	175m <sup>2</sup>	道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 四條四坊十五・ 十六町跡	都城跡	弥生時代 ～近代	土壇・柱穴・竪穴 住居・流路	弥生土器・土師器・須 恵器・緑釉陶器・灰釉 陶器・施釉陶器・瓦・ トチン・木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-4  
平安京右京四条四坊十五・十六町跡

発行日 2003年5月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961